まちのかくれた文化財

遊歩道路の開通によって広い浜辺は、少女達の夢をはこぶ。

昭和11年 茅ヶ崎の砂浜に 湘南遊歩道路が開通した。

1 茅ヶ崎名物将棋ダコ

百二十年の歴史を誇る七角形の茅ヶ崎将棋ダコが、異国アメリカの地で行われた一九七七年、世界カイト大会で、三部門のタイトルを全部独占し、日章旗を高々と掲げた。茅ヶ崎将棋ダコは、世界各国のタコの中でも、もっとも安定し、澄みきった青空に豪音轟くうなりをあげて、

「モーターが上がっている。」

など世界タコファンの度胆を抜かした。

タコを上げる糸がちょうど電線に似ている事から、電気の線だと思った外人が、糸にチョン、チョンと触れる滑稽な場面も見られたが、浅岡さんが、手の平を見せて、大丈夫だというゼスチュアを示す一幕もあった。

さてこの茅ヶ崎将棋ダコであるが、江戸末期の人、服部定右衛門（南湖）が将棋の駒にヒントを得て、将棋の駒は下が平だが、タコは七角形とし、日本でただ一つのタコを考案し、大漁祈願、子供の祝いを祈念したのがはじまり。

（上）上がり具合に気を配る浅岡さんと左田中英治さん
（下）会長の浅岡正幸さん

昔から風薫る五月の空に翻っていたが、終戦後すたれてしまった。

昭和五十年、浅岡正幸さん（元町十―二十四）が保存会をつくり、継承することになり、復活の日を見た。

茅ヶ崎将棋ダコ保存会には、大小のタコがあり、大きいタコは十四、五人いないと、とても上げられない。

綱は小指ぐらい。

小さいタコは、げん骨の大きさである。

お天気の具合、風の具合などあり、昔からタコ上げは、北風、南風、又は西風、東風、東西南北あり、いちばんよく上がるとされているのは、南の風で、風速五米以上で、うなりを立てて上がる。そのうなりは、茅ヶ崎甚句に、

へサァー茅ヶ崎、荒波育ち、

とあるように、茅ヶ崎の波は荒波である。怒濤つらぬく、岩に砕ける波の音にたとえられ、青空に舞い上がる、男の勇壮さともされている。

日本のタコ上げ行事は、一月と五月であるが、茅ヶ崎は、南風の吹きはじめる五月であり、タコにとって最高の季節である。

今や農村部が開発されて、畑の上空でタコ上げができなくなった。
そこでやはり海岸のタコ上げとなる。海岸ですと、電線も少ないし、汐の風を浴びながら、勇壮な将棋ダコに男のロマンを見る事ができる。
よい将棋ダコは、まず①竹、②紙、③糸の選び方。
竹は、目を通してまっすぐな竹を選ぶ。
紙は、和紙、和紙は水に強い、風を受けても切れない。将棋ダコは、無形文化財の紙が使用される。この辺では市販されていない。
糸は、昔の木綿糸、水糸、麻糸である。
大きさにより、竹の本数もふえるわけで、一つのタコづくりの中に、糸目の中心が、この位置でなければ上がらないという場所があり、そこから一センチづれてもタコは上がらない。
将棋ダコには、王将から歩まで、将棋の駒にあわせて保存されている。
将棋ダコ保存会の若者は、
「風に乗って空高く、うなりを上げる姿は、すばらしい。
体の中にどんなモヤモヤがあっても、忘れることができる。

（上）飾りものとしてもひっぱりダコ
（下）茅ヶ崎は南風の吹きはじめる五月が、最高の季節だ。

このような楽しさが、今うけている原因ではないか。」
浅岡会長は、
「日本でも名物のひとつになりました。アメリカならびに東南アジア、その他の国でも大変人気の的となっていまして、私も幸でございます。
茅ヶ崎市にのこす。後生に保存しようという意味で、二十六人で保存会をつくっています。」
今や将棋ダコは、床の間の飾りものとしても、日本国中から、ひっぱりダコとなっている。
茅ヶ崎将棋ダコ保存会に、声援を送ろう。

2 茅ヶ崎の芝居家師市川武三郎

敗戦直後の社会には、混乱と無気力とあきらめがひろがっていた。
〝赤いリンゴにくちびるよせて、だまって見ている青い空、リンゴは何にも言わないけれど、リンゴの気持はよくわかる〟
きびしい毎日の生活にうちひしがれている国民の間に、こんな歌が歌われていた、昭和二十五年。
岸武幸さんは、道楽からはじまって芝居家師市川武三郎一座を結成し、すきみきっていた人々の心にうるおいを与えていた。
岸武幸さん、大正三年十月七日生まれ、茅ヶ崎市茅ヶ崎三二五三番地に在住し、本職は大工さんでもあり、芝居家師でもある。
あの時代から、幾多の変遷を経て現在に至るが、岸武幸さんの式三番叟（しきさんばそう）は、茅ヶ崎に於いては最早、彼ひとりしか演ずる事の出来ない、キラ星の如く貴重な存在となっているのだ。

茅ヶ崎で今なお、三番そうを演ずる人は岸武幸さんだけである。

岸さんが芝居に打ち込むようになったのは、十八の時である。
学校時代特に尋常三年ぐらいから、
「ああいう芸ごとが好きなんですね。
一番端（いちばんはな）のきっかけと云うものは、本村でもって、素人芝居の稽古があったですよ。
で、私が好きだから、本村の若衆と、青年と一緒になって芝居をやった。
その時のお師匠さんが、平塚の私の親方でした。」
これが縁で岸さんは、年季をいれた。
しかし、岸さんにとって年季中が一番苦労の連続であったようだ。
師匠があっても、教えていただけないし、舞台へ出て、先輩の人達の体の動き、セリフ、声色を見てそれで修行を積む。
素人稽古のように、手を取って教えて貰えれば、十日か二十日で、舞台で口をきく事もできるであろう。それは普通できない。一般的には、そうすればいいと思うだろうが、師匠をとった以上は、それはできないのだ。まあ三年から五年、無駄めしを食うのだ。
岸さんは地元の生んだ芝居家師である。岸さんと観衆のコンビネーションは、ピッタ

りである。演技中時々声がかかる。
「みなさんに期待していただいて、それだけ有難いと思います」
昭和二十五年当時は、お祭りが盛んで、素人稽古が多い時だった。
茅ヶ崎各地の鎮守の神さまのお祭りも、おせよ、おせよで、若衆が冷やかし半分で、見に行ったものである。
がテレビが普及し段々下降ぎみになり、鎮守のお祭りは、羨望がなくなってきた。
筵（むしろ）も二～三枚ひいてある程に落ち込んだ。
しかし、今は違う。岸さんは、
「また生活の感じがちがってきた。やっぱり今は昔へ帰るという事でしょう。一時はちょっと荒（さ）びれましたがね。今はミコシも方々で復活するたとえですから、やっぱりナマの方が、年寄りにはいいと思います。」
と云う。
昭和五十三年に入って、三月二十九日第六天神社にはじまって、お節句には、厳島神社、七月は今宿という具合で、一年間に近辺で十五ヶ所ぐらいも声がかかる。
演ずるのは、固定忠治。昭和五十二年には、享楽の血煙。以前はやくざものを数々演じ

たようだ。
なんとも寂しいのは、茅ヶ崎では岸さん一人になってしまった事だ。
「今、東京の世田谷に住んでいられる人で、これはもう名優の座長、朝日日出夫さん。その人の一座を私がひっぱってるわけです。全部こっちで言うだけの人数を八人――十人すぐ連れて来ていただくわけなんです。
この人とは、私と組んでもう二十五年ぐらいになるでしょう。
役者は、手間で払うわけです。
一座連れて来たじゃ、あわないですよ。赤字ですよ。
休だけ来ていただく。」
それで衣装を持って行ったり、また下げたり、役者の運搬などは息子さんが、大工仕事の合間を無理して、おやじの道楽のために、やってくれるのである。
「それで、舞台を午前中配置して、飾って、衣装を全部とどけておいて、家で御飯食べて、それから楽屋入りするわけです。
で、むこうで終ったら帰って来て、家で湯を入って御飯食べて、それから東京へ帰って貰うわけです。」

全部一式家で、楽屋ではお茶だけいただくのですと岸さんは言う。
岸さんのようにベテランになると、もう練習はほとんどない。
普通だと台本習って、立ち稽古して、それで本番になるが、専門の興行師は、間に年季をいれている腕がある。
「祭りの日に、だいたい三十分前位に口立て（くちだて）だけなんですよ。しゃべっているうちに頭で覚えて、それで時間がくると、本番で舞台に出るわけなんです。我々はそういう癖がついちゃってるわけです。」
興行は六時から十時まで、昔は仲入れといって、一時間仲入れした。
今は仲入れのかわりに舞踊をやるのだ。
興行は、体力を使うし休みがない。
「毎日やってるだけに、仕事（大工）の方が楽だね。」
「自分じゃ、けっしてうまいと思わない、もう道楽程度でね。楽しみにやるだけです」
と岸さんは、謙そんしておっしゃる。
茅ヶ崎では、円蔵の鯛さん（ていさん＝高橋鯛五郎さんのことで、お神楽の名手がいた。
「天の岩戸」、「三神和合」、「桜狩」、「三番叟」、「やまたのオロチ」「天孫降臨」

など古事記や日本書紀から採った舞を演じた）が亡くなって、勝っつあんが亡くなって、勝っつあんの息子さんもいるけど、あとを継ぐ人もいない。
「芝居を教えてくれと言う人は、今はないですね。芝居をやるよりか、若いもんは舞踊が多いでしょ、その若衆が舞踊習ってるから、役者になるかと言うと、なかなかならない。
我々も一代ですけどね。一代ですから、衣装道具がもったいないです。
もう財産ですから。」
岸さんは、人生のほとんどを芝居にかけてきた。パチンコはきらいだし、相撲はきらいだし、ボクシングはきらいだし、好きなのは芝居だけ、あとは晩酌をするだけなのだそうである。
茅ヶ崎で今なお式三番叟を演ずる事のできる人は岸さんだけである。
式三番叟は、舞台では清めにつかう、尊いものだ。
「刃物、刀を使いますからね。まあ怪我のないようにね。
普請で言えば地祭り、建て前の上棟式に祝詞（のりと）をあげて、弓とのさを上げるでしょう。

あれを形式とったもんです。
清めを式三番叟でやるわけです。」
道楽です。楽しみが大いからね。
ただ楽しみだけでね。
岸さんとの会話の中で、
何回も聞いた言葉。
それは人柄から滲みでた
謙虚さであった。
　復活した祭りに今日も
市川武三郎一座がある。
　いつまでも、
健康で演じ続けて
いただきたいものである。

茅ヶ崎の職人気質、稲岡栄三

少年時代　稲岡栄三さんは、茅ヶ崎高のサラブレットと言われた人だ。茅ヶ崎の梯子乗り、纒は稲岡さんが元祖であるし、市の文化財に一早く指定された祭ばやしを子供達に継承するなど、茅ヶ崎職人気質の心意気そのものである。

明治三十五年三月十五日父金次郎、母ナツの長男として、茅ヶ崎市円蔵二二二五番地に生まれる。

学校は懐島小学校にかよった。懐島小学校は明治八年（一八七五年）の頃は、円蔵の淳化学舎、後円蔵学校などとも言われていた。服装はカスリの着物に下駄ぐらいで、家でつくった草履が履ければ関の山で、

「学校の遠足だせえっても、あつらえて竹の皮の草履をつくって貰って履いた。そんなもんで、あれは水が染みちまわないで軽くてよかった。」

「わしなんか胴乱買って貰った」と言って喜こぶ時代であった。大抵の者は教材を風呂敷に包んで、肩からしょったものだ。そうすると、いたずらが自由にできる。隠居（今の高橋一三氏宅）のあたりにあんずの木があって、あんずをもいだりした。それから隠居の裏には、くるみの木もあった。

「そんなところへ行っちゃ遊んだり、しかられたりしたもんです。」

子供が大勢で、さわぎさわぎゴヤゴヤ行

くから、
「野郎ども!!」
と言われ怒られる。
学校へ行って喉が乾くと、学校をぬけだして、こえんさん（高橋小右衛門さん）

まで水を飲みに行く。
「あそこの水は、いい水だ。」
だけど、
「あそこの井戸は、おっかねえぞ。側のない井戸だからな」
先輩が一年の栄三少年に教えた。水を汲むのは上級生がやってくれた。こえんさんの井戸水は、
「実にうめえ」
と栄三少年は言う。
懐島（かいとう）小学校は、一教室四年まで。柵が決まっていて、一年から二年、三年、四年までは一教室であった。円蔵と西久保、矢畑の子供だけで、いく人もいなかった。学校にかよう道順は、実に

さまざまであった。距離がみじかかったり、寒い冬だと下野（したや）、田端（たばた）—薬品治介さん宅）のところをまわって行くのだ。
「そうすんとね、あそこがね、今じゃあんな事はねえけれど、水がいつもあって氷が厚く張ってるわけで、人が乗れるほどね、昔は寒かったんでしょうね、それで氷の上で、コマをまわしたりしたんですよ。」
氷の上でまわすとよくまわる、とか言ったりしながら、
「わしゃ若いうちは、おとなしかった」
栄三少年は、あまり悪いいたずらはしなかったようだ。
楽しかった懐島小学校も
「ちーとばかり」
行って廃校になり、明治四十二年（一九〇九年）浜之郷に
「あれが五月の一日か、いつか鶴嶺小学校ができて、途中から鶴嶺へ行ったです。」
「あの時は、今宿の台小からも鶴嶺へ来るし、三つが一緒になったです」
学校から帰ると胴乱（どうらん）を放り投げて、夕方遅くまで遊んだ。ガキ大将は上級生の五一ちゃんで、
「そこらにある縄を切って、縄飛びをこしらえました」
「今のような、あんなできた紐は売っち

やいねえ」
そこらにあるじょう縄が活用された。
やがてきびしい冬がやってくると、なかよしの少年達は栄三少年の家に集まってくる。竹ん馬づくりをするのだ。竹はどこにもヤブがあったから容易に手に入る。栄三少年の家の南側には、ヤブがあって大きい竹が出ていた。竹ん馬にあきた少年達は、竹の昇りっこをした。
「今の学校には棒がおっ立っていて（昇り棒のこと）子供が遊んでまさあね。それですよ。わしらは自然の竹で、竹に昇っちゃスルスルすべっちゃおっこちてくる。いい竹が出ていました」
その頃若衆（わけーし）は、栄三少年の家の前の酒屋がたまり場で、
「休みだというと、家の前に来て遊んでいました。そこで〝力持ち〟せえって力だめしの土俵をこしらえたりして、店から酒だるを借りてくんです。あきだるを力だめしに、片方の手でちょっとおこして、尻をもち、上の方をなめる。それでたがをひとったがつづなめて、だんだん上へあげて行く。一番下までなめられるためしっくらを若衆はやって遊んでいましたね。」

青年時代　栄ちゃん栄ちゃんとみんなから親しまれた栄三少年の環境は実に恵まれていた。

その頃は、お寺を入れても十軒ぐらいしか家がなくて、どこの屋敷も広く、どろんこになって夜遅くまで飛んで歩いても、どこの大人達も、やさしく親切で思いやりがあった。
やがて栄さんも青年時代をむかえる。十八歳をむかえたばかりの栄三青年は、ほとんどの青年が農業に従事したが、自から手に職を持ちたい、との気持もあって、〝花の蔦職〟を選んだ。
職人のカラッとした性格が、栄三青年にピッタリしていたのであろうか、とにかく蔦米を訪ずれてみた。
栄三青年のやる気を感じ取った親方（蔦米）は、ほれこんでしまったようだ。
しかし、新米の栄三青年にとって蔦職は楽なものではなかった。苦境と幾多の人生の苦しみを経て、月日が経っていった。
「何クソ、負けないぞ」
くじけずに頑張っていたある日、親方（蔦米）から、カギサンの手伝をたのまれた。
カギサンの職人は青柳さんといって、住まいは今の銀行敷地になっている茅ヶ崎駅のすぐ前に、寒川屋というのがあって、そこの人で、カギサンの醤油屋専門に入っていた。その青柳さんが、手がたりないと蔦米に手を借りに来る。
親方（蔦米）は、栄三青年に、

「じゃお前（めえ）行ってやってくれ」
立ち上がりの小僧なもんで、
「わしは、必ずカギサンの醤油屋へ、仕事に行ってたですよ」
仕事に対する取り組み、根性が人一倍違う栄三青年に、ここでも青柳さんから
「お前（めえ）よくやってくれるから、行く行くは、今度俺がやれなくなったら、お前（めえ）にあとをゆずるから」
と言われた。青柳さんは、栄三青年の仕事振りを見て、ある夜、蔦米親方を訪ねた。青柳さんは、
「あの若衆（わけーし）をどうだ、今ちつと仕込んでみねえか。親方。やる気なら俺が、東京へ紹介してやるぜ。」
この話は、翌日仕事から帰ってきた栄三青年に蔦米親方から伝えられた。
「お前どうだい、東京へ行ってやってみねえか。青柳さんが、むこうへ問い合わせてやる、と言っているが、どうだい」
栄三青年は大変喜こんだ。立ち上がりの小僧になんともったいない話であろうか。
「ぜひ、行くべえ」
それから暫くして東京から返事がきた。
「仕込んでやるから、すぐによこせ。」
「こういう返事が来たから、お前行くか」
親方（蔦米）は栄三青年に聞いた。
「行くべえ、行くべえ」

それから栄三青年は、茅ヶ崎後藤商会（今の金物屋）で小っちゃなコリを買ってきた。
東京じゃ、こてえられねえ、親方に自分から行くだせえっちまったんだから、家へ来て、
「俺は東京へ行って仕事をするせえったら、おふくろ（ナツ）が『そんな所へ行くじゃねえ』せえって、さわぎやるんです。でも俺は行く、せえって東京へ行っちまった」

東　京　おふくろさんにとめられた東京行きであったが、栄三青年の夢は、自分をためしたい、若いうちは、うんと鍛えるんだと小っちゃなコリをかかえて東京に出てきたが、やはり不安はあったようだ。でも栄三青年は努力に努力を重ねた
「東京はよかったですよ。ちょうど行ってから上野の広場で、大正博覧会、平和博覧会と二回ありましてね」
栄三青年の東京生活は、日本橋の浜町であった。
「あれが明治座が二丁目にあったのかね。すぐこっち側が三丁目で、わしが行ったところは三丁目で、だから明治座のじきそばだったのです」
「あのほら、やっぱり職人だから三日か四日仕事をやっちゃ、今度はここえと行ったりして……東京はかなり方々歩い

たです」
東京の仕事をくりかえしているうちに、栄三青年は仕事も覚え、またはなやかな蒔職人の生き方など、先輩の影響を受けながら成長していった。

また栄三青年は、おふくろさんから、百姓だからどうにか東京まで行かなくてもやっていかれるから、行くじゃねえとさわがれた事を、いつも心の中にしまって仕事に励んでいた。だから茅ヶ崎の田刈とか麦刈の時は、家の手つだいをしたいと言って、茅ヶ崎へ帰って来るのである。家に来て、一週間でも麦刈をやって東京にもどると、
「栄ーさん、色が黒くなってきましたねえ」
東京の上（かみ）さんが言う。東京じゃなにしろ、家の中ばっかり仕事をしていて、
「汗をかくからね。あれは色が白くなってしまう」
と栄さんは言う。

曳　亀　茅ヶ崎の蒔米は、若衆を育てる名主としても知られている。
「かわいい子には、旅をさせろ」
が主義であって、栄三青年は東京は浜町の曳亀（ひきがめ）で修業することになった。
旅に出る――それは親のありがたさを知ること、世間に対する目を養う。集団の中で働く事は協力が必要なのだと気づく。ひとりのわがままは、他人に対してどんな事になるか思い知らされる。
職人が腕をみがく旅。かわいい子には、他人の飯を食わせ、修業を積んで人間形成をひと回りもふた回りも、大きくさせる願いが込められていたのだ。
さて栄三青年が修業を積む事になった曳亀は、家屋の建具が細く四角な木を縦横に組んで、間をすかしてある、いわゆる格子造りであった。
「あれが三枚から四枚と、黒く光っているんですよ。他の職人が出て来ない前にね。試くですよ。それだけをやっておかないと」
東京は浜町のメーンストリート若い娘さん達が、各家々のたたずまいを観賞しながら、通り過ぎて行く。
「若い時分だから、人の通りの激しいと

ころでもって、雑巾掛けやってんのが、そりゃあどうも、やな仕事なもんですよ
それと庭をちゃんと掃いてね。掃除しとくんですよ」
陽が西の空に傾むく頃、一日の仕事を

終えて家路につく。都合によって早くしまってくると、そうすると、
「栄さん、すいませんが、あの薪を割っておくんなさい」
と親方のおかみさんに用を言いつけられる。薪を割るのは、風呂のたきつけ、釜などなどの燃料とするために。
東京へ行ってから暫くたってから、
「あのあれですよ、田舎のことで、地下足袋なんての履いてても、小鉤(こはぜ)が薄い。」
親方のおかみさんが、
「栄さん足袋を誂(あつら)えておいたから、きたから履いてごらんなさい。
東京へ来たらね。こういう足袋を履かな

くっちゃいけない」
なんてね。お上さんから言われる。
浜町の曳亀は、家を曳く仕事などでは、東京で一、二を争うほどであった。
「三田の松岡か、浜町の曳亀せえ言われるくらい、東京でも一、二を争っていた家なんですね」
そんな家柄のところへ、栄三青年は、やはり茅ヶ崎でも一、二と言われる名門の鳶米から派遣されて来たのだ。
東京での仕事は、浜町の曳亀から電車で通う。荷物は車力を頼む。
「その時分は、車がねえから車力ですよ。荷車でね。車の梶棒の中に入らずにね。脇に腕木を出して、肩へ掛けて引くですよ。」
仕事で手がたりないと曳亀の親方は、
「深川の富川町へ行く。そこへ行くとね。立ちん棒が、しっかりいてね。朝なんかずうっといてね。仕事を頼みに行くのを待っているんだね。そこへ今日は、いくたり貸してくれ、せえって頼んで都合してもらう」
仕事場に着いた栄三青年は、
「わしなんか小僧だったから、段取りがどうやって、どこでこの家を上げるのか、どこでどう持たせて、これをどうするのか、はじめは段取りが分かんながったですよ。急所急所がね。段々慣れるにしたがって、分かってきた。一番大きいのは

ね。昔ですから、石庫ですよ。これはセメントを全然つかってなかったです。
それで三階ですよ。その段取りがチョットわしにも分かんなかったね。一緒にやりながら見ている。それで、こういうふうにして、こうやるんだせえのをやらされたけども、どうやってこれが何を持たせているんだかね、分かんないですよ。また仕事の方に欲がねえですね。
でも、結構おべえべえ気でやっていてもそれがどういうものか、その段取りが分かんねえくらいだったね」
茅ヶ崎から東京へ、生活の変化と相まって、仕事を覚える事に真剣な栄さんは、遊んでる暇がなかった。

「二丁目に行くと、明治座があるんですが、その明治座へも一回も行かなかった。ほんとうのじき、そこなんですが、いつでも行ける位のちょうしだったんでしょう」
曳亀の二階には、栄三青年を含めて五、六人で生活していた。その青年達にとって、日本橋の人形町は、唯一の楽しみの場であった。
「人形町は夜店が、ずうっと出てるんです、ひとまわりそこへ遊びに行くくらいの事で、人形町は東京でも一番賑やかな方でしょう。
フラッと歩いているだけで。夜店にはいろんなものが出ているんですよ、それを

冷やかし、冷やかし」
それで、たまには浅草まで行ってしまうのである。
「浅草まで歩いて行っても、わけは無いからね」
大正十年曳亀は、日本アルプス館の仕事をひきうける。
「まあ映画館みたいなものです。そこの全部を、建築から何からやったです。わしはその時に、はじまりからずうっとアルプス館に行ってたですがね。その時にあれですね。知ってるもんは、ひとりも見た事がねえですね。
博覧会だから随分見に来ましたがね。開館してからも、行ってふらふら遊んでるんです。がどっか悪い所ができた時にゃ直すように、用心で行ってるんですが、知ってる人でも来たら入れてやろうかなあせえってね。気を付けてるんだけど、全然見なかったね。で仕事が終ってからね。あの丸太なんか運ぶんですよ。その時ちょうど今じゃ上野広小路せえっても分かんなくなっちゃってるけど、広小路せえって、前が広くあったですよ。そこへ丸太を運ぶ時に、わしが荷車のあとをおして、一人が前っかを引っぱって来たですよ。そうするとそいつもなれてるもんだから、あのこう内まわりを外まわりから、左をぐるっとまわんなくっちゃいけない。それをいきなり、内まわりから

まわった。そうすると交通整理の巡査が『おい、おい』せえってかけてきゃがんですよ。それでわしも、いけねえ、いけねえと思っているうちに、しょうがねえ、まあ交通巡査に、どうもすいません。

まだ田舎から来たばっかりで、慣れていないもんだから、せえったら交通巡査が『田舎から来たような恰好じゃ無いじゃないか』なんてしかられましてね」

お前あの娘を連れて行っちめ　栄さんが一番親しくしていたのは、香川の新倉さん（写真右）だった。

「香川の岡本さんのすぐ前に、あれは新倉仙太郎せえったかな。それがイヌイの醤油屋の倉をやっていたんです。醤油屋に奉行していたんです。それでわしが、知ってるもんだから、あの東京へ行くべえ、そんな醤油屋の倉のものをやるより、東京へ行った方がいいせえって、おだてて

てね、わしが東京へ連れて行っちゃつたですよ。だからそれたあ仲が良くて、仕事を一緒にやったですよ」

「あれはわしと仲がいいんだけんど、気性がどうも、奴は銀流しみてえに羽織を着たり、かんかん帽子をかぶったりして出かけんですよ。わしは人形町へ遊びに行くには行成り半てんをひっかけて、猿股穿いてね。行っちまあだけんどね。奴はそんな風でね。それでもなんでも二人でよく遊びに行くですよ」

浅草の活動小屋（映画館のこと）は夜八時になると料金が半額になる。

「活動小屋は、夜八時になると、チャラン、チャラン鐘を鳴らす、それをイマハンせえってね、それから料金が半額になるんですよ。浅草のどこの小屋もそうなんです。で、浅草へ遊びに行っちゃ、チャラン、チャランが鳴るのを二人で待つてたですね」

一九二十年（大正九年）雹（ひょう）が降った。ここいらでは、稲をみんなこぼしたその年だった。

茅ヶ崎の鳶米親方から手紙がきた。

『横須賀線が複線になる、

田浦の奥に長浦せえとこがある。

トンネルの向こうが、長浦せえとこだが、そこが鉄道の複線になるんで、トンネルを堀っている。

その土を民家へ、打っちゃつたわけな

んで、それを上げてやんなくっちゃなんねえ、土の打っちゃり場がなくってね、みんな三尺（一尺＝三十、三センチ）から四尺ぐらい上げてやんですよ。こういう仕事が田浦の長浦せえとこにある。手伝ってくんな!!

栄さんは、東京曳亀の親方に手紙の内容を伝えた。

「それじゃお前、すけてやってきなよ」

その時、栄さんはちょうど二十歳であった。生意気も随分、生意気になっていた。

現場には蔦米から五、六人。それと保土ヶ谷からも仕事師が来ていた。

蔦米は手がたりなくて、横須賀の仕事師もたのんだ。栄さんはやる気満々だった。向かしびしが強く、鼻っぱりが強え。

「わしが東京から来たせえので、一番親方だ。そんで向こう水で、東京から来たんだ、こうやんだ、ああやんだ、せえってね」

「それで仕事がうまくいくですよ。その仕事は面白かったね。あの時分の事を思うと、随分うまい段取りをすると思ったけんど、今の曳前は昔以上に発達している。今はあの時分とくらべものにならねえ。段取りでレールを運んだり、あんなのは昔まだ十八、九じゃ楽じゃねえ。車がないから、いちいち担いじゃ狭えとこへ張り込む。昔はみんな担ぐんです。それだから肩にコブみたいのができた。

達者になんです。チーと遠くまで運ぶには便が悪いから、船積みで運ぶですよ。船に積みこむにも重てえのをやっぱりアイビかけてね」

長浦の栄さんは、東京から来たぐれえの調子で幅を利かした。家（蔦米）の方がもと請けだから、栄さんは張り切っていたのだ。

「ま下請けだけんど、上げんについちゃ、一番もと請けで請けおったからね」

長浦はここいらのちょうど田舎と同じだった。おやじさんは勤め、上（かみ）さんは百姓をやったりなんかして、どこの家へ行っても、みんなそういう風な経済だった。家はみんな百姓屋の造りだった。みんな栄さんの家みたいに大きかった。

「でそこの家に泊まってその家をやってんだけどね。そうすんと、あの時分には、まだ仕事が一生懸命で、そんな方へは、ご苦労なかったですが」

そこの家に、栄さんと同い年くらいの娘がいた。

「そうすんと、おふくろさんがね。『家のこんな奴でも連れていってください』せえですよ。そうすんと親方の蔦米が『お前、あの娘を連れて行っちめ』せえわけだ。連れて行っちめせえったってな、家に来てみりゃ百姓だ、麦ぶちはやんなくっちゃいけねえ……養蚕をやんなく

っちゃいけねえ……こんな百姓だ。向こうでも百姓にはちげえねえけんど、向こうじゃ小っちえ、野菜を作ってるぐれえの百姓だからね。娘を連れて行ったって、それに第一まだ仕事の方が一生懸命で、

そんな方角もなかったね」

その娘は、お湯は始終たってくれた。台所もやってくれた。蕎米の親方が、

「栄さん、お前の魚と俺のと取りけえんべえ」

娘が台所をやってくれるから、栄さんには魚のいいのをつけてくれるのだ。

蕎米の米櫃　そうこうしているうちに、横須賀線の仕事は終わった。もう一度東京の曳亀へもどって今度は、

「宮内省の帝室林野監理局（ていしつりんやかんりきょく）せえとこなんか、仕事に行ったけんどね」

宮内省に入るには、本鑑がいる。栄さん

は、身分証明書なんてのは持っていなかったが、曳亀の親方は、栄さんがたしかな人間だと分かっていたから、仕事に連れて行った。

「そこには騎馬巡査の稽古場だなんてあったねえ」

「せえからね、あの寺内さんだったかね、新宿の高いところでしたよ、あの内閣をした。そこの門なんか冠木門（かぶきもん）でね、それであれですよ。肥後騒動だせえったかね。その時の門をそっくりそのままこっちへ持ってきて、門にしただせえってね、鋸で挽きこんだあとだのゆきで門の柱をたたいたそんなのをそのままおっ立った。

曳亀での栄さんは、仕事が終るとその日のうちに日誌をつけた。

「出面（でづら）をね。今日は何処へ行って、こういう仕事をした。それを毎日帰ってくんと付けたですよ。そんでねえと親方に『栄さん、今月はいくんち、いくんち仕事をした』とかせえってね、聞かれたから、勘定賃うに都合が悪いから、出面を付けてたですよ。こういうところへ行って、こういう仕事をしたせえのを付けてたですよ。ノートえね、何月何日せえって書いてね、今日はひとり、門前仲町なら、門前仲町のこういう所へ行って、こういう仕事をしたせえのを住所から、全部書いたですよ」

「この前、砂村のどこかとかせえのをテレビでやっていた。あの時分は砂村せえば、それこそネギの本場みてえで、ほとんど百姓ばっかりだった。ネギ種を、このへんまで、砂村のネギせえって売ってたですよ」

「なんでえ、東京だせえったってこんなだよ」

と言う会話があちこちで聞かれた。

「もっともあれは東京府下だからね」

こうして栄さんは、東京の曳亀からまた茅ヶ崎の蔦米へ戻ってくる事になった。

大正十年であった。東京へ行った時と同じあのコリに荷物を入れたスタイルであった。

しかしあの当時と栄さんは、チョット違っていた。

「形（なり）もすっかり東京の形になったしね、その当時、ここいらでは、職人なんかで、皮靴なんか履いてんのは、めったにいなかったけんど、ぎゅうとした形（なり）をして、生意気も出たしね」

曳亀の親方は言った。

「ながいあいだ、ご苦労様でした。じゃまた折を見て来てくんな」

大正十二年頃、茅ヶ崎の建築の大手は「震災の学校なんか、大きい請負は難波さんか、海岸の松本か、あの小和田の真壁さんかね、それからあの町屋の小島伊勢松さん、それだけぐらいのもんだった

ですよ。今じゃ、そけえら中から入ってきて、いれんな大工や請負が、そけえら中ふえてるけんど、その当時は、そんなもんだったね」

難波さんの弟で、松本さんという人が海岸で、大工の請負いをやっていた。その人がこんど大森の八百善の別荘三棟を請けた。東京大森の山の高い所で、栄さんに、それを専属でやってくれと言うのだ

「大工の松本が、たのみにきてね、それもやっぱり蔦米の指図でしたがね、わしが専属で仕事があっても、なくてもそこへ行ってました。『やあ、やっぱり栄さん、お前来てくれてよかった』で松本の棟梁が、『うちじゃ、家でつかってる大工にゃ、半纏を出してんけんど、まだほかの蔦とか左官とかのそういう方面には半纏を一枚も出していねえ、でお前にだけやるせえわけにはいかねえから、お前にはやんなくっちゃわりいけんど、これを持っていってくんな』」

松本の棟梁は栄さんに、紬のような反物を一反さし出した。〝本当にご苦労様でした〟というわけで、栄さんは半纏より高価な、お礼を貰った。

その時分、まだ茅ヶ崎で蔦職をやってるものは少なかった。

「蔦米、蔦鶴（おじいさんが兄弟だった。蔦米は、その本家からの分かれ）が一番大きかった。それと今の和田モータース

せえのが市幸の前にある、あれがまあちゃん、まあちゃんせえって、親方一人だったけんど、それと青柳さん、あの人も鳶の資格を持っていた。

鳶鶴さんがやってる時分は、茅ヶ崎新町は町内の鳶として、新町の通りは、ほとんど鳶鶴さんの出入り場だった」

震災後の鳶米は、一番若くて栄さんが一番上をやっていた。

「ですから、やりにきいですよ。よく身上（しんしょう）もちなんてのは、材料引くにも荷車引っぱって行くに、かじ棒へ入るのをいやがるんですよ、だから、わしが一番若えから、よく一番さきに荷車を引くですよ。そうすんと鳶米の親方が、窓の所あけて『なぜ車を、ほかのもんに引っぱらせねえんだ』」

だから、その時分栄さんは結構大事にされた。年始に行っても、栄さんの座わる床の間のところは、ちゃんとあけてある

栄さんが一番あとから行っても、鳶米の親方が、

「じゃ、栄さんが来たから、ずうっと向こうへ行ってくれ」

だから若い栄さんは、心ぐるしいほど、きまりが悪い。下へ座る人達は、栄さんより年上の人ばっかりだ。

このころ栄さんに、鳶鶴の若衆が、渾名を付けた。〝鳶米の米櫃（こめびつ）〟……だと。

大正十二年関東大震災

神奈川県下の死者、行方不明者二九、一九一人。当時茅ヶ崎町の人口二〇、九〇〇人、家の数三、二二三戸、地震で倒壊した家は、二、一一二棟、半壊一、〇二七棟、人命の犠牲一五五人、重傷者九六人であった。

「震災後はね、地震仕事師せえってね、随分職人がふえたです。われも、かれも

でもって、みんな仕事師になったもんだからね。そうすんと、金回りがいいからね。やれ平塚へ遊びに行くべえ、藤沢へ行くべえ、せえって遊びばっかり、はやっちゃった」

〈せえー細の提灯、え組と書いて
平塚がよいのえーほどのよさ

夜になると、ほとんどみんな遊びに出かける、これじゃしょうがねえと栄さんは考えた。

そうだ、夜何か稽古ごとをしたらどうだ。円蔵には文化財級のお神楽がある。友達を誘って

「思いついたのが鯛さん、勝っちゃんが、まだ丈夫だったからね、芝居をひとつたのんでね、素人芝居を教えてもらったわけなんです。それを習ってね、それから、それへちょっとみんな熱中したからね」

素人芝居、大盛況　「その芝居がまあいずれお金がかかるんですがね、習った師匠の礼、衣装も借りるし、着せて貰ったり、顔を塗って貰ったり、全部人の手でやって貰うのだから」

「それでそれこさ、わしなんか女形やったけんど、腰巻までしめて貰うですよ。あれはへんですね、普通の女の人ですと、後ろからまわして前で合わせまさあ、が役者は男が女になるには、そうじゃなく

して、前からまわしていってね、後で合わせちまうですよ、そうすんとね、歩くにも、膝と膝と合わされちまうから、いやでも大きい股はできないですよ、そうやってわしが女形（写真左）やりました」

で若衆もあまり悪い遊びもしなくなった。

「じゃこのへんで、中祝をひとつやってんべえ」

「わしの前の嘉一ちゃんの家を借りて、一般の人に見て貰うわけですがね」

高橋嘉一さんの家は草屋で、とても大きかったが、家の中へ入りきれない程、いっぱいの人が見に来た。

「その時はじめて衣装つけたり、顔をぬったりして貰ってね」

この中祝に骨を折ってくれた人は、吉野嘉一ちゃん、いっしゃん、小山文ちゃんであった。その後稽古じまいは三月のお

節句、お宮の舞台を借りて開いた。その時は部落へ相当迷惑をかけたと栄さんは言う。

「全部であれは相当花がかかったからね。部落へも相当迷惑をかけちゃってね」

この時も芝居の経費は、栄さんが直接たっちしなくても、嘉一ちゃん、文ちゃん、馬場（ばんば）の蜩（てい）さん、勝っちゃん、おせんさん、みんな丈夫だったから、あとの謝礼や何かの始末はしてくれた。

「衣装だとかのお礼は、全部部落の人がくれた花でたりたですよ。自分達は相当出し合いっこする覚悟ではじめたけんど、別に大した事もしねえですんじゃったですが」

それからその後、この芝居はアッという間に世間に知られた。

「アノー、前に茅ヶ崎座せえのがあったです。」

十間坂のお宮のチョッと手前の東海道の反対側に、茅ヶ崎座せえって映画もやる大きい、芝居小屋だったです」

それが出来たので、

「それじゃ、そこでやってんべえ」

という事になった。

「勝っちゃんだなんてがね、でえぶよくできたから、そこでひとつやんべえじゃねえかせえってね」

ただしそこでやるには、小屋の借り賃が

三百円である。その時分の三百円だと田地一反が買えるくらいの値であった。

それでも栄さん一座は、茅ヶ崎座を借りた。木戸銭をとると税金がかかる。

「だからね、木戸銭せえって貰わずに、木戸無料にしちまうべえ、せえわけなんです。ただしあの時分にはみんな、下足があったです」

で下足料十銭也。十銭で公演したが、これも満員の盛況であった。栄さんは、これもいくらか持ちだしのつもりでやったのだが……。

「衣装つけから、顔をぬる人、それに衣装代と、小屋代など全部払ってもね、まだ残ったですよ」

この反響は大きかった。

「南湖の下（しも）のお祭りが、じきだったですよ」

下（しも）の世話人が、

「お祭りで、あの円蔵の芝居を」

と頼みにきたが、その時はどうしても都合が悪く、行く事ができなかった。

「そうしたら、今度は萩園のお祭りが、三月なんですよ、そんでぜひ円蔵の若衆の芝居を借りたい。萩園には行ったです」

出しものは、天下茶屋の仇討、中幕狂言、曽我の対面、工藤祐経と対面するところである。曽我の対面、これはもう十八番中の十八番で、仇討を全とおしでやっ

た。
「あのテレビなんかでも、あれですね。天下茶屋の仇討ち、そういう狂言をやってますね。」
一度わしが、としをとってから仕事に行っている家で、わしも若いうちは、こういう事をやりましたよ、なんてせえったら『ああ天下茶屋の仇討、じゃあれですか、だれそれは誰れがやりました』なんて、そこの奥さんがね、くわしくってね、せえから、『もとえもんというのは、これは悪役がとてもいいですね。じゃもとえもんは誰れがやりました』なんてそこの奥さんが、とてもこの狂言が詳しくって話し込んじゃったですよ」

用田のおシズさん　大正十四年四月、栄さんは、おシズさんというかわいらしい、まだあどけなさの残る嫁さんを向かえた。栄さん二十五歳、おシズさん二十二歳の時である。このなれそめは次のようだ。栄さんは震災の時、高米の親方から、御所見へ出張してくれと言われた。そこで栄さんは、ある用田の家の物置を借りて、そこに寝とまりして、御所見の村役場から学校、村会議員の家など、方々おしてまわった。
現場での親方は、もちろん栄さんで、一番若くても〝兄い〟と呼ばれていた。だから、たいがい仕事から帰ってくると、

「栄ちゃん、湯がわいたから、へっちめなあ」
栄さんより年寄りの人から、声を掛けられる。そんな時、栄さんは心の中でつぶやくのだ。へっちめせったって、わしよりみんな年寄りで悪いからな。栄さんは大きな声で、
「みんな一緒に、へっちまあべえ」
年が若いからやりにくい。
そこで栄さんの選んだおシズさんは、用田の下駄屋にいた。内田下駄屋といって、下駄の材料を貨車でとって、卸をしていた。おシズさんの姉さんが、そこの家の嫁になってるもんだから、その妹のおシズさんを、手伝いにつかっていた。

「わしらは学校の仕事をしていちゃ、下駄屋の前を通るんでさあ、仕事場には、職人が三、四人いて朝、必ず仕事をしているんで、行きがけ覗いてみたり、けえりに覗いて見たりしてたわけなんですよ。でまあ下駄屋のおやじとわしのおやじはいとこなんです。で知ってんもんだから、わしも、じゆうちゃん、じゆうちゃんせえって、家（茅ヶ崎）へ行ってくんだから自転車貸してくれ、なんだのせえっちゃ、そこへ行ってたりなんかして』で栄さんは、そこのかわいらしい娘さんの事は知っていた。があまり眼中には、おかずに仕事に精を出していた。
「そうしたら、こっちへ帰って来ちゃっ

てから、どうも下駄屋のじゅうちゃんが、家へちょくちょく来んですよ。
てえげえよく来んな、へんだなあせえってたら、そこの寺前のともちゃんせえのがいんですよ」
ともちゃんは、栄さんと仕事を一緒にしていた。栄さんよりそれこそ二十も歳が上だったが、栄さんに使われていた。
そのともちゃんが話をもってきた。
「お前（めえ）あれだよ。用田でもって下駄屋の姉さんの妹をくれんべえせえけんど、どうだ。見に行かねえか」
栄さんは、
「わしはそんなもの見に行ったってしようがねえ」
それでもなんでもともちゃんが、
「いっぺんいけいけ、俺もたのまれて一緒に行くんだから」
それからこの話は、とんとん拍子にまとまった。

梯子乗り　震災後の鳶職人は、急激に景気がよくなった。つまり景気がよくなって、ゆとりがもてるようになり、はしご乗りなどが行われるようになった。
「ま、いずれ梯子の稽古をするわけなんですが、鳶米は鳶米で、鳶鶴一巻は兄弟巻で、稽古をするんです。鳶米は親方の家が会場。鳶鶴、鳶助一巻は合同で今の十間坂の豆腐屋の反対側に、鳶鶴の弟で

熊ちゃんせえのが鳶をやっていて、それでそこの前へ梯子をおっ立って稽古をしたんです」
梯子の立っているすぐ筋前の奥が、お湯屋になっていた。
「そうすんとね。その時分は、純水館があったですよ。それで純水館（じゅうすいかん）の女どもが、みんなお湯入りにくるんですよ」
お湯の行き帰り純水館の娘達も、若衆の勇ましい梯子の稽古に見とれていた。
鳶鶴一巻の若衆は、
「純水館の女どもが来るから、楽しんで梯子の稽古に力が入るわけなんです」
片っ方じゃこんなわけで、派手に梯子乗りの稽古をしているのだが、栄さんのいる鳶米の方では、四、五人で地味に稽古を積んでいた。
それに鳶米では、式典で梯子に乗るのは栄さんだけなのだ。
「鳶助、鳶鶴さんじゃ大勢あったけんども、何くそと思って、ひとりでがんばったですよ。でわしは家から、鳶米の家まで梯子の稽古に行くんですけんど、親方の家まで行くには、鳶鶴一巻が稽古をしている前を通って行かなきゃなんねえですよ。で帰りにもまだやっているんです。稽古している出方同志（でかたどうし）は、みんな友達なんですからね、だから仲はいいんです」

栄さんが見ていると、
「『えー栄さん、やってみろ、やってみろ』せえわけなんですよ。ところが、このわしが稽古いくら見ていても、わしよか二つばかり出来ないやつがあるんです。ここでやると、わしがそれをやんなくっちゃなんねえ、だからこりゃ出初めの式まで、決っしてやるんじゃねえと思ってやらないですよ」
梯子のまわりには、純水館の娘が大勢見ていた。
いいところなんだが、栄さんはとうとうやらずに正月は七日の出初めの式の前の晩を向かえた。稽古のかえり、いつもの場所を通ると、鳶鶴の若衆が、
「相変らず『やってみろ、やってみろ』せえから、よしきた今日はひとつやってやんべえ、あしたはもう出初め式だから、いくら若衆がふんばってやっても、できっこねえと思うからね。あのあれは背亀で、昔は鯱（しゃち）せえったけんど、逆にして大の字になって、背亀からね。それがその当時鳶鶴一巻では、やるにはやるけど形が違っていて、できないです」
それで栄さんが梯子に乗って演技をしたら、
「べえー」
と感心してしまった。
「こりゃーいい。こりゃーいい」

を連発したが、ところがもう明日の出初めには、いくらふんばっても稽古はできなかった。栄さんは、八双、爪掛八双（つまがけはっそう）、それから屋形がえし、
「くりっとかえっちまうでしょう。落っこったように見せて、落っこちないですよ」
この二つが栄さんは、得意だった。
いよいよ正月七日、茅ヶ崎の梯子乗りに記念すべき時がきた。今では鳶職人が盛んに梯子乗りを継承しているが、この時は、まさに大きく言えば、歴史の上に一ページを印す一瞬だったと言っていい。
栄さんは、身軽に梯子を一歩一歩のぼった。
そして栄さんは、背亀を演じた。
それは今、この茅ヶ崎の地では、はじめてのめずらしい形として、人々をアッと言わせた。
「わしもその背亀をやった時には、自分で背亀をやってながら、梯子の下の方でね、手がなるのがよくわかんですよ。いくら夢中でやっててもね。あーこりゃ喝彩がおええやと思ってね」
この時は栄さんは、演技をしながら大変気分がよかった。
それから今度、今ひとつ爪掛八双から屋形がえしというくるっと逆さに身をかえる、つまり落ちたように見せかけ、実は手

が梯子にかかっている、その演技を栄さんがやったところ、本当に落ちてしまった。栄さんはビックリした、いくら稽古をしていても、こんな事はなかった。落ちた時スリ傷ができてヒリヒリした。怪

我はなかった。

「こんなわけはねえ、もう一度上がらせてくれ、せえって上がっていったです。そんで今度は、それだけやんべえと思ってやってみたですよ」

また、落っこちだ

「や!!こりゃいけねえ」

栄さんは頭に血がのぼった。

「止まんまで、のさしてくれ、せえって いまいっぺん上がんべえと思った」

そうしたら鳶米の親方が下にいて、

「栄さん、よせよせ」

親方は栄さんの体をかかえて、よさせてしまった。

栄さんは、得意な演技で梯子から落ちて

しまった。

栄さんはなぜ落ちたのか、それは鳶鶴の若衆と出初めの朝、今の西友ストアーのあたりに小西屋という、いっぱい飲み屋があって、若衆同志だからいっぱいひっかけたのが悪かったようだ。

さて出初めが終って栄さん達は、十間坂のお宮の前、新町の通りと片っ端から鳶鶴の若衆と梯子の演技をして街を歩いた。街の人々は大変喜こび、栄さんは心地よい疲労感を残して、その足で鳶米の家へ帰っていったのである。

「やあ今日はごくろう様だった。よくやってくれた」

鳶米の親方と岩壁清ちゃんは、お礼を言いながら、

「まあいっぱいやってくれ」

と酒をすすめるのだった。

岩壁せいちゃんと云うのは、昔の田舎まん中と言った今の電気器具店の北側に住んでいた。鳶の仕事をしてイヌイに入っていた。

鳶米では世話役で、今でいえば顧問役、鳶米と兄弟分みたいになっていた。

「お前はふだんおとなしい方だから、鳶職にはどうかと思って、俺も案じていたけんど、今日はよくやってくれた」

鳶米の親方は、岩壁清ちゃんと喜こんでくれた。栄さんはその時つくづくありがたいと思った。

あの梯子乗りから数ヶ月が過ぎ、夏の陽が照りつけるある日、

「えいの字、栄の字」

と栄さんを呼ぶ人がいた。その人は南湖の難波直次郎（初代）さんで、

「お前の梯子乗りは、茅ヶ崎じゃ、右に出るもんがいねえ」

と言うのだった。

栄さんのお飾り　お正月玄関などに飾るお飾りは、今では随分普及して、商品としてスーパーなどで売られているが、商品用としてでなく、ひとつひとつに職人であった栄さんの気質（かたぎ）がぶち込まれた、栄さんのつくるお飾りには、街のかくれた文化財としての気品がある。

さて茅ヶ崎でのお飾りは昔は町内の頭（かしら）といって、町内蔦が決まっていて、新町は新町で町内蔦がしめていた。だいたいが蔦鶴に決まっていたが、蔦米では腕の器用な栄さんが頼まれて仕事をした。栄さんが右も左もわからない小僧の頃、親方から、

「お飾りを、こせえんだから夜来う！」

なんか言われてよばれた。栄さんの家は百姓だから、藁を持ってこしらえに行ったのである。だから栄さんがお飾りをつくりはじめたのは、小僧の頃で、親方の家で夜なべをした。

小僧の頃だから昼間働いて夜はきつい。こきつかわれて、つらくても行かないとしかられるから行ったようなものだ。

その後、街場も増えて、一時浅草まで買いに行った事があった。ところが東京へ行くには、今のように車が全然ない。で運送屋だけが車を持っていた。

「それを蔦鶴と蔦米共同で一台借りて、浅草の市へ行ったです。市は暮れの十二月十五日朝市といって、お天とう様が上がる時分には、もう終えちまうですよ。朝暗いうちでね。それをまにあわせるように、買いに行くなんですから、大変なもんですよ。車の荷台には、若いもんが一緒に乗って行くですよ。今じゃ車のと

けえ乗っちゃいけねえせえって乗せませんがね。その時分には乗ってたってかまわないですよ。四人でも五人でも、それに乗って買いに行くですよ。そうすんとあの浅草の広い庭が、全部お飾りばっかりなんですよ。その値が『今年は品うすでもって』とかで、日によって、上がり下がりがあんですよ」

ところが茅ヶ崎のお飾りだが、きれいなのはできない。ここいらでは、稲の実をとった後の殻でこしらえるから稈（みご）がでてきたない。

「浅草では、実とらずせえって、実をとらないでこしらえんから、きれいにできてんですよ。藁が全然違うですよ」

「あの時分浅草のお飾りは、米を無駄にしてるわけなんです。米が高いですから、もったいないですよ。ここいらでは、そんな事はもったいなくて、できないですよ。米がこぼれていれば拾う時勢だったからね。米が大事な時期ですから」

栄さんは浅草のお飾りの過程をしきりに陰で研究していた。たまたま蔦米の出張で蒲田へ仕事に行った事があった。

「ちょうど蒲田の撮影所が、大船へ移転した事がありましたね。そん時のまだ松竹撮影所があったせえ時分、仕事に行ったです」

その時分、そのまわりは全部百姓だった

「田んぼばっかりでね、そうすんと夜に

なると、お上さん相手に、おやじがお飾りをこしらえてんですよ。それをわしがちょっと見たですよ。ハハアこりゃあいい所へ来たと思ってね。せえからわしは、そこへ行ったですよ。そんで何となく、そこのおやじさんと話し話しそれを盗んで来たわけなんですよ」

だから栄さんは、師匠があって教わったわけではない。

「でまあ、だいたいそれを見て覚えてきて、しきりにこしらえたけんど、家の方じゃ実をとった稈のついた藁でこしらえるから、そういうふうにはできないです。しばらくたって、米が生産過剰だせい時分、ちいっと田の間へ、早く刈って実をとらねえようにしてこしらえると、結構じょうずにできたですよ」

それで最近になって、

「あの茅ヶ崎文化資料館でね。郷土会の塩川さんが藁細工の講習を催しられた事があったですよ。そん時にね、午後はお飾りの講習だせえってね。ハハア塩川さん、こんな事を文化資料館でやってんけんど、誰れが講師で来んかなあと思って、そん時にもわしもそれを普段やってんからね、見に行ったですよ。」

見たところが、講師らしい顔がひとりもいないんですよ。

『塩川さん誰れが講師で、お飾りをやってられんですか』と聞いたんですよ、塩

川さんは『別に講師せえはねえけんど』せえってねお飾りをつくっていられんです。『塩川さん、それじゃだめだよ』わしがせえったですよ。『じゃ誰れかわしの家へ一緒に行って貰えますか。あの藁を持ってきてやりますから』塩川さんが『じゃ稲岡さん、そうしてくれ』せえってね。

『まあこういうふうに、こせえなきゃだめだよ』塩川さんは『ハハアなるほどな』せえって、それでわしがやってるうちに講師になっちまってね」

その時は遠く大井町の方からも来ていて、栄さんがしきりにこしらえていたら、

「あのう、お宅では家でこしらえてられるんですか」

と言われた。栄さんは、

「十二月になれば、これをずうっとこしらえてます」

「じゃあお宅へおうかがいしてもいいですか」

「ええ、そういう気持があったらぜひ来ておくんなさい。十二月になれば、いつおいでになっても、こしられてますから」

栄さんは、この人がよもや来られやしないと思っていた。ところが、突然来られてビックリした。

「亡くなった夫のために、私がこしらえたというのを、見せたいから、それ一心

でこしらえたい」

と言う。

さて栄さんが心をこめてつくったお飾りは

「わしゃ輪光寺へは、かかさずお飾りを上げてんですよ。わしができる限りのとこまでは、まあひとつお寺へ上げさせて貰いたいせえってね。」

栄さんがタル飾りを覚えたのは、鳶米の親方からだ。鳶米は栄さんだけ連れて、みよし屋だとか、松風邸（茅ヶ崎館のそばにあった）へ仕中やりに行った。ほかのものは知っていなかったが、栄さんには伝授したのだ。

お飾りは日頃お世話になるお宮と公民館にも、毎年上げている。

「三が日はお宮に上げてね。お宮が」しまっちまうと、公民館へ持っていって、公民館へ飾っておくんです」

バカ踊り大会　「バカばやし、あれはおもしろい。トスク、トンスク、スットントン……。　タイコと笛とカネが入ってね。バカ面かぶって踊るんです。あれは、とても調子がいいです。面にものを言わして、面をふるから、とてもよく見えんです。わしが、あれをやんべえ、やんべえせえったんだけんど、みんなきまり悪がっていたが、昭和五十一年あたり子供に仕込んで、大岡祭でちっと、やらせた

んですけんどね。これがまた好評でしたね。」

昔から続く伝統を栄さんは、何んとか継承したいと張り切っている。その努力が実り、神社境内では〝バカ踊り〟が披露されるようになったし、祭りには、かわいらしい子供達の面行列が見られるようになった。

「タイコはね。調子を低くして、笛をよく聞こえるようにして、踊りを生かすんです。とても人気があるんです。もっともっと子供衆に仕込もうと思っている」。

栄さんの生きのいい目がキラキラ輝く。明治は遠くなったが、われらの〝生きている文化財〟栄さんは、まだまだ健在だ。栄さん、いつまでも丈夫で!!

われらの栄さん、がんばれ!!

茅ヶ崎歴史散歩

1 大岡祭

茅ヶ崎市北部の堤地区は、江戸時代大岡家の知行地（戦功によって、徳川家康から与えられた）であったところから、この地に、三代忠世が浄見寺（じょうけんじ）を建立して、大岡家代々の菩堤寺とした。

大正元年（一九一二年）、大岡越前守忠相（おおおかえちぜんのかみただすけ）公に、天皇陛下から従四位が贈られたことを契機として翌二年大岡祭が始められたが、その後関東大震災や、戦争でながらく中止になっていたが、昭和三十一年四月から復活した。

桜の木が並び、満開の花びらの山門をくぐり、本堂前の石段を昇ると、右手に五基の墓が並んでいる

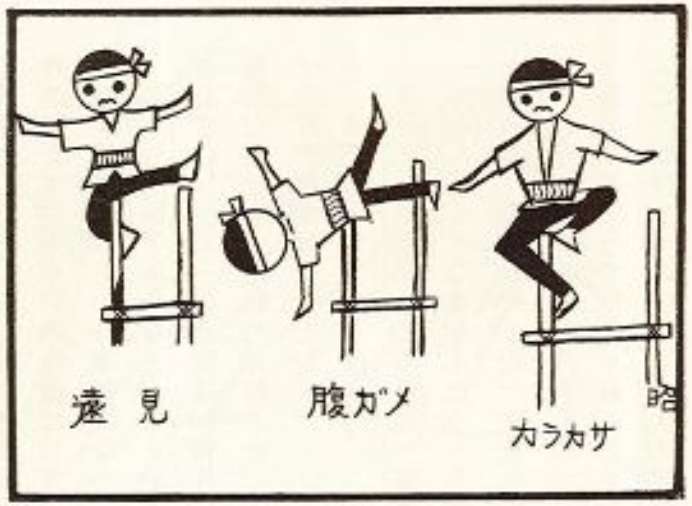
が、そのうちの周囲に玉垣をめぐらしてあるものが、越前守忠相の墓である。大岡祭は、毎年ここで墓前祭が行われ、幕を開ける。日曜日のビック・パレードは、木やり、まとい行列、大名行列など約千五百人が、茅ヶ崎駅の南北周辺を中心に練り歩き、越前守忠相の遺徳をしのぶのである。

大岡越前守忠相（一六七七年～一七五一年）は、一七一七年、普請奉行（ふしんぶぎょう）から抜擢されて、江戸町奉行（いまの都知事や警視総監、それに裁判官をかねたような役）に任命された。大岡越前守が名裁判官であったことを伝える話は、数多くある。

子供をうばいあう二人の親に、両方で子供の手を引っぱらせた。子供が泣きだしたので、生みの親は人情に負けて手を離した。そこで、生みの親と育ての親の見わけをつけたなど、その裁判ぶりは、公正で、迅速であった。

六〇歳になった大岡越前守は、寺社奉行に任命された。たいへんな出世で大名の職である。この時五九二〇石となり、役職給を加えて大名の格とされた。

江戸町奉行から大名になったのは、大岡越前守のほかにはいない。



2 明治から続く梯子乗り

茅ヶ崎の梯子（はしご）乗りは、江戸の影響を受け、明治時代にはじまった。

盛んになったのは、大正時代で鳶栄（とびえい）さん達が、正月七日の出初め式に、鳥井戸橋で演技をしてからである。

本来梯子乗りは、高い所で仕事をする鳶職の準備運動なのであるが、今では催し物として残っている。

初めて梯子乗りを実施したのは、江戸に住んでいた〝加賀鳶（かがとび）〟である。加賀鳶は、前田藩に属しており、屋敷内の火消し役も兼ねていた。

その当時の話であるが、出火の知らせを聞いた加賀鳶は、上野池の端近くの現場までやって来たが、火の手が見えず、持って来た梯子を、火の見やぐら

の代用とした。しかし火の手が見えず、もう一度梯子の灰吹きのところまで登り、足を竹に支えて右手を目の位置におき、あたかも高見の見物でもしているような格好をした。これが後に遠見という演技になったといわれている。

こうした梯子乗りなど、古くから伝わる伝統を後世に伝えたいと、茅ヶ崎古式消防保存会では、小川一已会長達が張り切っている。平素高い所で仕事をする人達は、大変ご苦労な事だが、鳶職の身軽さを、皆さんも機会がありましたら、ぜひご覧ください。梯子乗りの種類は次のとおり。

一、梯子の上で行なう技

遠見・一本遠見・二本遠見・孤遠見・腹ガメ・肝（きも）つぶし・かんたん夢の枕・一本かんたん・二本かんたん・八双（はっそう）・爪掛八双（つまかけはっそう）・ひざかけ八双・屋形（やがた）がえし・カラカサ

二、梯子の途中で行なう技

谷のぞき・うでだめ・麻（あさ）の葉・ねずみ返し・吹流し（ふきながし）・甲掛け（こうがけ）・大の字・逆さ大の字

3 萩園村の大飢饉

享保（きょうほ、一七三二年）、天明（てんめい、一七八三年）、天保（てんぽ、一八三〇年）と茅ヶ崎の村々は、大飢饉（ききんとは、農作物が実らないで、食物が欠乏すること）に見舞われた。

この飢饉で特にひどかったのは萩園、そのほかには、西久保、小和田、菱沼、茅ヶ崎、平太夫新田などであった。

農作物が不作となり、飢え死にする人は数えきれないほどであった。「食べるものがない。」「そのうえ領主による年貢の取り立てだ。」「わしらは、これからどうすればいいのだ。」人々の嘆き悲しみは大きかった。領主による年貢の取り立ては、取れ高の五〇％におよび、生活はいつも厳しい。したがって災害

に備える蓄わえなどは、まったくなかったのは、当然の事である。……

……萩園（昔は萩曽根という。）はその昔、相模川の中洲であった。流砂によって生まれた地質は、下層部が砂利となっている。永い歳月と農民のえい智によって、広大な萩園耕地を作り上げ、農耕による拓けた村づくりを完成させた。萩園の地名は、萩が茂る萩原から名づけられたといわれている。

この萩園では、他の村々とことなり、相模川の氾濫で大きな被害をうけた。泥水は村の中央を、うなりをあげ、ヘビのようにうねりながら田畑を押し流し、村を川底にしてしまった。農民達は、相模川の土留に精を出す傍、代官に年貢米の供出が出来ない旨の申請を出し、江川太郎左衛門に認められた。代官に認められる事は、革命的な出来ごとであった。この事は飢饉に苦しむ大勢の人々に、どんなにか大きな喜びを与えた事か。

萩園村の農民のこの勇気ある決断は、後世まで高く評価された事であった。

今では新興住宅地として、開けつつある平和な萩園である。

4 円蔵の三つ角

時は鎌倉時代、源頼朝が妾を西久保のお寺の近くに預けた時分、円蔵辺りは随分さむらいが住んでいた。この辺りは懐島といって、鎌倉とは大変ゆかりの深い地で、御屋敷と言われるところには、懐島景義が居館を構えていた。景義は鎌倉幕府の普請奉行といわれて、頼朝に大事にされていた。寺や神社の設計、施工にいつでも間に合うように大工、かべぬり、やねふきなどの職人をあちこちから集めて、職人のまちを形成していた。今でもその名残りとして、円蔵は職人のまちだといわれている。

さて懐島景義の居館は、大変立派なもので、周囲には敵の侵入を防ぐ、大きな空濠が作られていた。さらに円蔵部落の四方の主要道路は、みんな三つ角

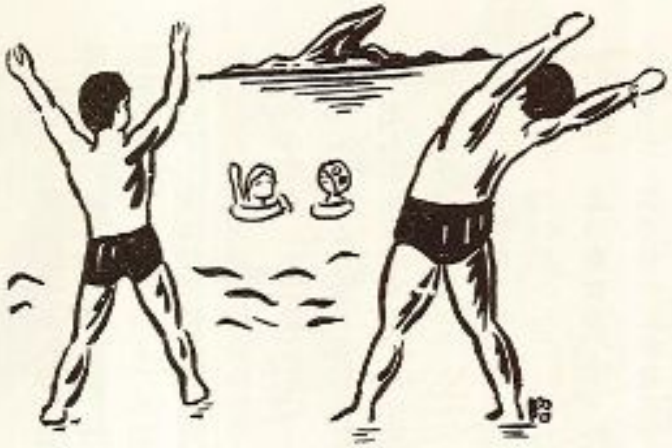
ばかりにした。三つ角にした理由は、四つ角では、道に不審番しているさむらいが、後方から切り殺される危険がある。そのために考えだされた防衛策なのである。

この話を教えてくれたおセキさん（八十三歳）は、

「今は時代も変わって、御屋敷へ行く人の便を考えて、十文字の道もできました。またカーボシがじょう口をつくる時、三つ角が四つ角になったりしましたが、円蔵はどこへ行っても三つ角だったんです。私がまだ懐島小学校の時（明治三十七年）、母から油を買いに行かされた。『油買ってこないと、夜がくらいから』と言われ、いやいや円蔵の油屋まで行ったが、その頃はまだ円蔵はどこも三つ角が残っていました。新道のそばの石橋だって五十センチくらいの狭い橋でね。さみしい道をやっと渡って油を買いに行ったものです。」

と懐しそうに語るのだった。

今や大変な鎌倉ブームだ。みなさんも、鎌倉幕府ゆかりの地、円蔵を歩いてみましょう。



5　茅ヶ崎の歌

広い砂丘と美しい松原、オゾンいっぱいの茅ヶ崎海岸は療養地、別荘地としても知られてきた。昔、九代目団十郎も愛した茅ヶ崎の浜辺は、今は若者のアイドルとして海水浴に、サーフィンにと賑う。彼らは気軽に、茅ヶ崎の夏をおう歌し、声高らかに歌う。茅ヶ崎の海の歌を――。

〈茅ヶ崎駅から、俺んち経由　海にぬける道　生まれた場所から　多分死ぬまで　一筋のびた道　わんぱく坊主が駆けてくる　破れズックに夢つめこんで　海風　潮風　松林　拾った貝がらはポケットの中　（加山雄三・加山雄三通り）

〈ラララ砂まじりの茅ヶ崎　人も波も消えて　夏の思い出　（サザンオールスターズ・勝手にシンド

バット）

〈波打ち際を、濡れぬように歩くあなた……　低い雲間に天気雨　見る見る煙る水平線……夏のはじめの通り雨　ついてないのはだれのせい　白いハウスをながめ　相模線にゆられていた茅ヶ崎までの間　（天気雨・松任谷由美）

〈ハアー海は茅ヶ崎　浜降り祭り　どんと繰り出すいさみ肌　波もはやせば鷗もおどる　（まつながが音頭・笹みどり）

〈沖の潮風　うば島ごしに　吹けば平島　しぶきに濡れて
（ふるさと音頭・花村菊江）

〈光あふれる湘南の　白い雲わく相模灘　えぼしの岩に散る波は　松の緑にこだまする　（茅ヶ崎市歌）

〈私しゃ茅ヶ崎荒波育ち　波も荒けりゃ　気も荒い　（茅ヶ崎甚句）

テレビ・ラジオからこれらの歌が流れると、もうじっとしていられない。

白い雲、まっ青な海、茅ヶ崎の夏は、あの浜降祭から本格的なシーズンをむかえる。心はずむ。四季折々、私達に夢と希望を与えてくれる茅ヶ崎の浜辺、今日もわんぱく坊主のはずんだ声が、サイクリング道路を行く。

6　大山街道と富士塚

江戸時代は、大山信仰が盛んとなり、大山街道は随分賑わったものである。

大山の山開きがはじまると、子供衆は街道に集まる。道者が一文銭を与えてくれるから。

昔は子供は神の子とされ、江戸から大山に向かう道者は、信仰の一つとして子供衆にお金を与えた。初詣などで神社にお金を、奉納するのと同じ考えである。

山開きとともに、よしず張りのサギ茶屋は大変な賑わいとなる。今の鶴が台団地あたりが田んぼで、見晴らしがよい。サギの大群を見ながら、茶をすする。

その近くで、歩くとドンドン音がする。〝ドンドン塚

は、東海診療所のあたりだ。

西久保に入ると、高時さん（西村時夫・西久保一、三三五）の所に富士塚がある。

富士塚とは、富士山を模した〝ミニ富士〟で、富士登山ができない老人たちの信仰の対象物として、江戸時代後半から、つくられた。東京・神奈川・埼玉だけにある。

茅ヶ崎の富士塚は、今では「何んとか保存したい」と高時さんが、目印を立てたが、東京・江古田の富士塚は、昭和五十四年重要有形民俗文化財に指定されている。

7 鎌倉古道

鎌倉古道は、京都と鎌倉を結ぶ主要道路として様々な歴史を、今に伝えてくれる。

それを偲ぶものとして、大正年間の地震によって下町屋橋付近の水田が、八十センチほど低下した。その時、不思議な杭が現れ、土地の人を驚かせた。それは旧相模川の橋脚であった。橋脚は檜（ひのき）材で、全部で十一本水田から現れた。

これは、建久九年稲毛重成（いなげしげなり）が、亡き妻（北条時政の娘）の供養のために架橋した。開橋式は盛大なもので、源頼朝をはじめ、鎌倉武士の多くが参列した。しかもその橋供養の帰途、頼朝は落馬し、それが原因で、正治元年にこの世を去ったといわれる。

鎌倉古道は、ここよりチョコレートの会社を経て、国道を北に入る。梅雲等のあたりは、当時を偲ばせる道幅が、今も残っている。『相模川を渡りぬれば懐島に入り……』と海道記に歌われたように、やがて懐島の景勝地八丁松並木が見えてくる。その並木に平行して、鎌倉古道は野道となって残されていたが日本住宅公団の埋め立てによって消えてしまった。参道の太鼓橋は、めずらしい形で有名である。鎌倉武士の守り神八幡様が敬かだ。源家ゆかりの五輪の塔十基は、社の後方、竜前院にある。源頼朝落馬の責任をとって、十人の警護の武士が、腹を切ったと伝えられる。

鎌倉古道は、矢畑ノ萩園線に改修され、広い道路に生まれ変わった。矢畑の肥地力バス停から工場の中へ道は消えているが、この辺りまでは、武将懐島景義が、目を光らせていた所だ。更に鎌倉にむかって進むと、北茅ヶ崎から本村へ。茅ヶ崎高校の後方から、松林中学の前を通って、小和田熊野神社裏手、上正寺を経て、湘南海岸から鎌倉に入る。

この様に茅ヶ崎は、鎌倉古道の相模川を控えた交通の要地として、鎌倉幕府を守る内郭の門となっていたのである。

8 東海道

〈東海道は松並木……

と歌われた国道一号線は、その風情を今に見ることは出来ない。開発による伐採によって、特に東海道イコール松というイメージが薄れたからだ。

さて東海道は五十三次、これは五十三人の善知識という仏の教えから、とり入れられた。すなわち旅をすることによって、土地の人々との出会い。そして悲しさ、つらさ、なつかしさを学ぶ。これが求道（ぐどう）の師だ。

東海道名所記によれば、いとおしき子には旅をさせよ。

万事おもい知るものは旅に勝ることなし。

長路を行きすぎるには、物うきこと、うれしきこと

とりどりさまざまなり……。

さて江戸時代の茅ヶ崎は、小和田のなみだ橋から七里役所まで茶店が立ちならび、特に菱沼の茶屋町には、おいしいぼた餅を売っている店があった。

やがて六本松の処刑場を過ぎると、一里塚だ。一里塚には大きな榎があり、旅人はその木蔭でひと休みする〝いこいの場〟となっていた。

その南には小高い砂山があって、これを高砂（たかすな）と言っていた。

南郷松原に入ると、有名な江戸屋あり。

〈南郷の茶屋の江戸屋では、十七揃えて、お飯もらせる

土地の民謡にも歌われ、旅人に愛された江戸屋八郎左衛門という良い茶店は、あんこうを名産としていた。

茶屋町は鶴嶺八幡宮とともに旅人で賑わったところで、広重をうならせた絶景の左富士を名所としていた。

茅ヶ崎の歌

1　茅ケ崎甚句

〈サアー私しゃ茅ヶ崎　荒波育ち
波も荒けりゃ　気も荒い

〈竹になりたや　八竹の竹に
うらはえびすのつり竿で
元は当世流行の尺八で
吉原娼妓さんじゃないけれど
つまらぬ所に穴をあけ
五本の指につばつけて
穴の回りを
くるりくるりと撫でまわし
末はフウフウ（夫婦）となればよい

〈娘十七、八、嫁入りざかり
たんす長持（ながもち）
鋏箱（はさみばこ）
これだけ持たせてやるからにや
二度と戻ると思うなよ
父さん、母さんそりゃ無理だ
西が雲れば風とやら、
東が雲れば、雨となる
千石（せんごく）積んだる船でさえ
波風荒けりや、出て戻る

〈頃は六月、頃は六月田植時
姉は妹に負けまいと、

妹は姉に負けまいと　一緒懸命
とっていた（・又は田植する）
すると盗（はる）か向こうの
彼方（かなた）より
一羽の穴バチ飛んで来て
妹のオソソにちょいと止まり
姉さん姉さん取っとくれ
姉さん取るのはやすけれど
昔故人のたとえには
穴バチャ他人の手に掛かる

〈好いたお方と　添えたいために
一で　相州一の宮
二で　日光東照宮
三で　讃岐の金毘羅さん
四で　信濃の善光寺
五つ　出雲の大社（おおやしろ）
六つ　村々鎮守さま
七つ　成田の不動さん
八つ　八幡（やはた）の八幡さん
九つ　高野の弘法さん
十で　東京の名高い招魂社
（しょうこんしや）
これだけ神頼（しんがん）
かけたのに
好いたお方とそえぬなら
神や仏は
いりゃしない

〈サアー茅ヶ崎名物　茅ヶ崎名物
左富士
上り下りの東海道
松の緑の吹く風は
昔も今も変らねど
富士の高根と男だて
相模おのこの晴姿

〈白サギみたいなお方にほれて
カラスみたいに苦労をする

〈めでためでたの若松様よ
庭に鶴亀　五葉の松

〈サーサー皆様　お歌いなさい
歌じゃ　ごきりょうが
さがりゃせぬ

〈送りましょうか　送られましょうか
せめてお宅の門（かど）までは

〈さんぜん世界のからすをころし
お前さんと朝寝がしてみたい

〈鳴くなチャボッ鳥
まだ夜は明けぬ　明けりゃ
お寺の鐘がなる

〈こぼれ松葉をあれ見やしゃんせ
枯れて落ちても二人連れ

〈咲いてみごとな小田原つつじ
もとは箱根の山つつじ

〈信州信濃のしんそばよりも
私しゃあなたのそばがよい

〈色で売り出すスイカでさえも
中にゃ苦労の種がある

〈さしたさかずき中見てあがれ
中にや鶴亀、五葉の松

〈甚句歌うよな　いなせなねえさんと
共に苦労がしてみたい

〈細のチョウチン　※え組と書いて
平塚がよいのほどのよさ

〈今日の天気にとばとれとれと
なんでとりゃりょかぬれとばを

〈向こう通るは清十郎じゃないか
笠がよくにたすげの笠

〈目くのはらがけかたはだぬいて
出たか勝負のほどのよさ

〈車窓あけ青空ながめ
あの星あたりがまぶだやら

※印は部落名を入れる。(例)南湖・は組など。

〈五万石でも岡崎様は
城のきわまで船が着く

〈八幡大門、町屋橋、なん時橋、
馬入川
こえて前にきたもの
かえさりょか

〈松になりたい、なみ木の松に
諸国大名下に見る

〈文(ふみ)はやりたし
書く手はもたぬ
白紙やるから文と読め

〈書いた文(ふみ)さえ
読めない私
なんで白紙が読めましょか

〈米のなる木でつくったワラジ
はけば小判のあとがつく

〈色けづいたか川端柳
日日(ひにち)毎日水かがみ

〈川なか流るる古木でさえも
ほたるに一夜の宿を貸す

〈せめて廊下の四、五丁もあれば
逃げるまねでもしてみたい

〈待てばそわれる身を持ちながら
逃げて世間をせまくする

〈朝顔の花によく似た
あのさかずきで
今日も酒、酒、あすも酒

〈朝咲いて四ツにしおおる
朝顔さえも
思い思いの色を持つ

〈早のカンペイさんは
みのきて笠もって
おてっぽかついでシシうちに
ひと山こせどもシシはいぬ
ふた山こせどもシシはいぬ
向こうの小山の谷底に
ズドンとうったるふたつだま
シシうちとめしとおもいしが
シシにはあらじ旅の人
つけはないかとふところに
しまのさいふに五十両
死んだおかたはいるまいと
貸して下さい旅の人

〈紀州きの国みかんの出どこ
青いうちには
誰れも手をだすものはない
色ずきゃ女中さんの手にかかり
皮をむかれてまるはだか

みかんぐらいはまだおろか
四月八日のおしゃかでも
甘茶にだまされまるはだか
おしゃかぐらいはまだおろか
平塚がよいの私でも
あの子にだまされまるはだか

〈向こうに見ゆるは
よどの川瀬の水車
おやじのしゃっ金火の車
兄貴のひくのが人力車
姉さんとるのが糸車
坊やの持つのが
ピーピーデンデンかざ車
大八車でおしだすような
あなたの手くざに
おっころころりと
のせられましたよ口車

〈一番鳥の二番鳥
三番鳥それさ鳴くまでも
かわいあんたを寝かしおき
夜明けてみれば雨と風
雨風吹くのにかえさりょか
お部屋晴れての客じゃない
お部屋晴れての客なれば
みのかさふじゅうはさせやせぬ
お部屋晴れての客じゃない
私の前かけみのにして
いきな手ぬぐいかさとして

お部屋しのんで送りだす
かえるあんたの心より
かえす私の身のつらさ

〈お竹だいにち　ごにゅらいさまよ
昔しゃごはんたきしたそうじゃないか
ところへごんちゃん入りこんで
オソソにごこうがさしたとき
ごんちゃんビックリぎょうてんし
ぬれまらかついでにげだした
あーエッサ、エッサ、エッサッサ

〈おのやあんちん清姫さま
おにげなされししだの川
あーじゃになっても
この川を渡るにゃなるまい
ザンブザンブと
アーコリャショエ

〈竹になりたい
コリャ大阪新町新くだりの
じゃのめのからかさ　ろくろの竹に
ひろげたのあなたにさせたい

〈おーさい、おーさい
よろこびあれや
ほかへはやらじと
抱きしめる

〈今日の天気になぜ船ださぬ

ただしゃお江戸が船どめか

〈今日はうれしや
みな様一座　あすはどなたと
いきざやら

〈つれてゆくから　髪ゆいなおせ
島田じゃ世間わたれない

解説（茅ヶ崎甚句について）
茅ヶ崎甚句は、村祭りの酒の席、みそぎの祭（今の浜降祭）などで、若い衆によって、よく歌われた。
歌詞がたくさんあって、
いくつもいくつも歌い続けられる。

2．茅ヶ崎柳島エンコロ節

その一

〈サアーエーションガエンジャ
オカレマイ
目出度いな目出度いな
今日この家ノーエ
御祝儀に一万吉日の日を選び
先ず繁昌ノーエ
守り神座敷に出したる盃に一
台のまわりに松置いて
この松成人したならば
一の枝には銀が成る
サテ又次ぎなる二の枝に
黄金の花咲く米がなる
三と祝いし三木の枝
三木を総じて祝うなら
亀がはやして鶴が舞う
なんとその鶴舞い遊ぶと
立寄り聞けば　お家繁昌と
舞い遊ぶ　ションガエー

その二

〈サアーエーションガエンジ
マダオケヌ
正月二日の初夢に
きさらぎ山の夢を見た
きさらぎ山のくすの木で
船を作りて今おろす

舟はしろ金檜はこがね
檜柱をおしたてて
せびは黒檀帆は紫檀
ともに大黒へ（表の意味）
にゃ恵比寿
中に積んだる御荷物は
布袋、福禄、毘沙門、弁天、寿老人
宝の荷船頭急がし、日寄が続く
浦賀は番所で改めて
花の御江戸へひとひより
ションガエー

その三

〈サアーエーションガエンジャー
マダオケヌ
鶯や鶯や、たまたま都へのぼるとて
都の宿は長い宿　都の宿で日が暮れて
一夜の宿を取りかねて
浜の小松の二の枝に
芝を食い寄せ巣を作り
ナニの卵を生み揃へ
ナニの卵に目鼻つけ
親子と共に立つ時は
長柄（ながえ）の長子（ちょうし）
をくわえ出し　呑めよ大黒
騒げよ恵比須
受けて喜ぶ
神の神
ションガエー
（合の手）

○東西東西、西は馬入を始めとし
そも中島の人々と
小港（こう）なれど柳島
連（つ）れの松尾を一同に
町屋を北に眺むれば
晩は南湖泊りとし
銭（ぜに）は大原（おおはら）
つかみ取り
円蔵、矢畑、前岡の茅ヶ崎木村と
とほほ、うやまって申す

○竹山不動出てみれば
大浦賀浦に帆かけて
走り水ともへ
浦賀はつなぎし舟の艫（とも）
網はエンヤ
八幡（はた）くり浜へ
庭に中（ちゅう）しのかなだ浦
出ばって見えるが松の先
とほほ　うやまって申す

解説（えんころ節について）
保存会々長、内藤常吉さん
相模川の河口に位置する柳島は、古くから港が開かれ、江戸時代には盛んに、江戸、浦賀、伊豆方面と航海が行なわれていた。
当時の舟は、帆船で四百石――五百石積の、大型船が八、九隻あり、柳島の港は小港なれど、大変にぎやかだった。と伝えられる。
エンコロ節は、これらの舟にのる、いわゆ

る海の男たちが、航海に出るまえに、
海上の無事や、航海の安全を、
祈願するために、船の中のいろりを囲
み、酒を飲みながら歌った。

3　茅ケ崎南湖麦打唄

〈南湖の浜にゃ　ハードッコイ
名所あり
浪元（なみもと）には、平島
沖にゃ姥島（うばじま）
ハードッコイ　ドッコイ

〈南湖の茶屋の　ハードッコイ
江戸屋では
十七をそろえて、おめしょ
もらせる
十七をそろえて、おめしょ
もらせる

ハードッコイ　ドッコイ

〈お前の声を　ハードッコイ
聞きたさに
七つ山、八つ山越えて
ここまで
七つ山、八つ山越えて
ハードッコイ　ドッコイ

〈南湖ではやる　ハードッコイ
魚売り
キスやキス　生ギス　サメのかまぼこ
キスやキス　生ギス　サメのかまぼこ
ハードッコイ
ドッコイ

解説（南湖麦打唄について）
保存会々長、富所松平さん
麦の脱穀のとき、クルリの拍子をとる
ためにうたう。
昔、茅ケ崎の一帯には麦畑がたくさん
あり、
毎年夏の頃になると、クルリの音とと
もに、麦打唄を聞くことができた。

あとがき

もう二十五、六年昔のことから、私の心の中にまるで、きのうの事の様に鮮明に、のこっている懐しい思い出があります。

西久保に山口太郎吉さんと云う方が住んでおりました。

山口太郎吉さん（安政生まれ）は、茅ヶ崎一の長寿者で百二歳で亡くなるまで、元気で明るい素朴な人でした。

色紙に百歳のサインなど書いて、長寿にあやかりたい大勢の人達に、一枚一枚色紙をプレゼントしたりしていました。

カッパ徳利の昔話を世に出した人は、この人で鶴嶺小学校の先生が、大正時代絵を書いて紙芝居にしたので、この話は日本全国に広まりました。

私が一番面白かったのは、大好きな浜降祭の話でした。山口さんの子供の頃は、禊祭（みそぎのまち）といって、鶴嶺八幡宮の神輿を中心にして祭典が行われていました。そののちの明治九年に、茅ヶ崎のあちこちでやっていた浜降りの祭典を合同して、七月十五日に実施したの

102歳　山口太郎吉さんと高校時代の筆者　　１９５６年

①K
②0938

■著者　高橋昭和
1939年茅ヶ崎市円蔵に生まれる。
文、イラスト、写真による、わかりやすいふるさとレポート。
著書「茅ヶ崎の民話」「浜降祭」「おみこしドッコイ」
＊現住所―〒253
神奈川県茅ヶ崎市円蔵2605番地

茅ヶ崎の昔話　改訂版

著　者　高橋昭和
初　版　1978年10月1日
改訂版　1980年10月1日
制　作　アルファ

© AKIKAZU TAKAHASHI 1978. Printed in Japan

だという事でした。それまでは、鶴嶺神社や寒川神社などは、別の日に祭典をやっていたのだそうです。

明治九年の合同祭典には、山口太郎吉さんも、茅ヶ崎の浜辺で見たと、言っておられました。

又、近くにお神楽の名人、ていさん（高橋鯛五郎さん）が住んでいました。

この人も夏の夕べ縁台（えんだい）を出して、私達子供に昔の話をしてくれました。

真裸でふんどしいっちょうで、うちわで蚊をはたきながら、目を輝かせて話をしてくれました。

私達の住む茅ヶ崎には、昔から人から人へと言い伝えられてきた面白い話が、沢山、沢山あります。

そして、この茅ヶ崎を誰よりも愛し、陰の力となって現在も活躍している方々がいます。

つたない文章ながら、この方々の心、茅ヶ崎の心を語り継ぎたく、精一杯書かせていただきました。

昭和53年10月1日

三年前にこの本を出版しましたところ、幸い沢山の方に読んでいただきました。その後、再版を希望する問合わせが多く、アルファの御厚意により再版するものです。

昭和55年10月1日　高橋昭和